



Title	病理解剖からみた胃癌の予後：統計的観察
Author(s)	森村, 義行
Citation	大阪大学, 1959, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/28196
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	森	村	義	行
	もり	むら	よし	ゆき
学位の種類	医	学	博	士
学位記番号	第	5	2	号
学位授与の日付	昭和34年6月3日			
学位授与の要件	医学研究科病理系専攻 学位規則第5条第1項該当			
学位論文題目	病理解剖からみた胃癌の予後 —統計的観察—			
	(主査)	(副査)		
論文審査委員	教授 宮地 徹	教授 久留 勝	教授 木谷 威男	

論文内容の要旨

1) 目的

胃癌病理解剖例から胃癌の進展に影響を及ぼす因子の分析を試みた。

2) 方法

関東、中部及び関西地区の18大学及び2国立病院で主に1946年から1955年の10年間に剖検せられた胃癌820例を対象に、すべて実地に赴き臨床経過及び病理解剖記録を精査し、更に解剖材料の保存せられている例についてはその肉眼的所見並びに組織切片から作製した組織標本に基づいて各例を分類集計し統計的に処理した。

3) 結果

§ 標本の吟味：ここに得た胃癌剖検例はその年令分布に関してほぼ同期間の厚生省死因別統計による胃癌の年令分布と有意の差を認め得る。即ち本剖検例では死因別統計に比し、年令分布のピークが男で約10才、女で約15才若くなっている。

年令群別及び性別にみた手術的処理の有無及び手術内容では、男女間には差を認めず、若年群（34才以下）では手術例の中での胃切除術が行なわれている割合が低く、最高群（65才以上）では非手術例の割合が高く手術例の中での胃切除率も高くなっている。この点では臨床からの報告とよく一致した傾向を示している。

§ 非手術例についての分析：

病理解剖から見た胃癌の進展度と年令の関係をみるために、剖検時の胃癌の全般的な進展の程度によって、転移・浸潤の様式にかかわらず胃及び所属リンパ節に限局しているものと、全身に広汎に拡がっているものと、その中間的なものの三階級に分けて、年令階級別にみると、明らかに年令の推移と共に各進展度の構成比が変化し、若年者程第3度のものが多く、高令になるにつれて第1,2度の占める割合が増加し

ている。このような関係は男女ともに認められるが男の方により著明である。

然し年令群別にみた症状発現から死亡までの期間では（34才以下、平均7.2カ月、35～64才：7.3カ月、65才以上：7.9カ月）その散らばりの大きさからみて有意の差を見出すことは出来ない。そこで以上のことをから、胃癌の進展の速さが年令の推移と共に変化しているのではないかということが考えられる。

次に剖検時の胃癌の組織像と胃癌進展の関係をみると、Broders の組織学的分化度による分類を行ってみると、年令的には若年群では未分化なものが多く高年群では比較的分化したものが多くなり、その関係はほぼ年令と進展度の間に見られた関係と同じ程度のものである。然しながら組織像と進展度の関係を直接しらべてみると、確かに未分化な胃癌程進展高度のものが多くなっているが、両者の関係は決して一次的なものではない。即ち組織像から見た胃癌の分化度は或程度胃癌進展の速さと関係を求めるこことは出来るが、組織学的分化度のみで進展の速さを論ずることは出来ないと思われる。

§手術例についての分析：

手術例をその内容によって単開腹群・姑息手術群・胃切除群に分けて、非手術群と共に症状発現後の生存期間を比較すると、胃切除群のみが明らかに遅延した生存率曲線を示している。然しながら胃切除群の死亡時の胃癌の進展度、年令と組織分類の関係、各進展度別にみたその他の臨床及び病理解剖所見の頻度手等の点で非術例と比較してみても、前者が胃切除が可能であったという点で胃癌の形或いは性格が後者と本質的に異なるとは考えられない。即ち胃切除群にのみ生命の延長が認められたのは、主に腫瘍組織の大半が切除されたという量的な問題に帰することが出来ると考えられる。

胃切除群のうち臨床的に明らかに再発としての経過をとった例について、剖検時の胃癌進展度を術後再発症状発現までの期間と、再発症状が出てから死亡までの期間に分けて見ると、前者の方が期間的にも可成り長いのであるが死亡時癌進展度との関係が密接であるのが見られた。

4) 総括

胃癌の性状と年令との関係について、若年者胃癌が悪性であるという点については既に種々の観点から論ぜられており、ここに得た成績からもその点が指摘されるのであるが、必ずしも所謂若年者胃癌のみが胃癌の中で特別な形を示すものではなく、特に胃癌の進展の速さという点では年令の推移と密接な関係にあることが示された。胃癌の組織学的分化度はこの点で一つの因子となっていると考えられるが、それ以外にも年令と共に推移する因子が胃癌進展の重要な因子となっていることが考えられる。又若年者胃癌は確かに社会的意義から重要な問題となるのであるが、高年者の胃癌はその発生頻度において遙かに若年者を凌ぐものがあり、外科手術法の進歩と相俟って今後可成り重要な問題になると考えられた。

次に現今胃癌の早期発見に対する一般の啓蒙と臨床検査法の進歩及び胃癌の根治手術に対する外科手術法の改善にも拘らず、全胃癌集団に対する根治率は到底一割にも達しないことから、胃癌の症状発現後の対策のみならず症状発現前の胃癌の動静についての解明が行なわれねばならないことを示唆するものと考える。

論文の審査結果の要旨

目的

胃癌の病理解剖例から癌の進展に影響を及ぼす因子の分析を行った。

方法

本学及び関東、中部及び関西地区の各大学病理学教室で主に1946年以降の10年間に剖検された820例の胃癌について、病理解剖記録を精査し、解剖材料の保存せられてある例についてはその肉眼所見並びに組織切片から作製した組織標本に基いて、非手術例及び手術例に大別して分類集計し統計的に処理した。

結果

① 胃癌の剖検時に於ける進展度は年令と密接な関係にある。このことは女性にも認められるが特に男性に顕著である。然し年令によって初発症状発現後の生存期間には有意の差を認めない。以上のことから胃癌の進展の速さが若年者ほど速く、年を取るに従って遅くなっていることが認められる。

② 組織学的な分化度から見た胃癌の組織像も年令と或程度の関係を認めるが、剖検時の進展度と組織学的分化度の関係は密接なものではない。即ち組織学的分化度のみで胃癌進展の速さを論ずることは出来ないと考える。

③ 胃癌が進展する際には可成り特徴的な進展の型を示すものが多い。各々の進展型は、年令、性別、生存期間及び組織像等の点で或程度の特徴を示している。

④ 胃癌の手術例の中、胃切除の行なわれた群だけに可成り生命の延長が認められる。

⑤ 胃切除の行なわれた群の中、臨床的に再発の経過を示した例について見ると、剖検時の胃癌の進展度に対しては、再発症状が現われてから死亡に到るまでの期間よりは、胃切除が行なわれてから再発症状が現われるまでの期間の方がより重大な関係にあることが示された。

要するに本論文は、可成り多数の胃癌病理解剖例について、その進展に影響する因子を多方面から分析し、特に胃癌の進展と年令の関係を明らかにし、又再発例の分析から胃癌の進展には症状発現前の癌の動静が重要であること等を示したものであって、今後の胃癌対策に於て示唆する所が多く、学位論文として価値あるものと考える。